

2018 年度コラボミュージアム作品づくりコンテスト

小学校・中学校部門 アピールシート

平成 31 年 1 月 23 日

所属名 :	香川県高松市立東植田小学校
実践学年組:	5年
氏名:	窪田啓伸

教科	道徳
実践期間	平成30年 12 月 6 日
実践タイトル (35 文字以内) 「相手の立場に立って考えてみよう」	
<p>実践の目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「謙虚な心で相手の立場を尊重して考える」という「寛容」の心について理解を深めることができる。 ・自己の考えをタブレットに表現することを通して、互いの考えを共有・比較することができる。 	
<p>実践のポイント・工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他社との対話である「友達対話」や、自分との対話である「自分対話」を通して、他者理解や価値理解を深めていけるような学習過程を創造する。 ・タブレットとの持つ「可視性」、「共有性」、「可変性」といったよさを生かし、友達と交流しながら自分の考えを深めていけるような学習を組織する。 	
<p>実践内容 (簡単に)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. えり子とよし子の日記のうち一方を読む。 8名のうち、4名ずつ異なる人物の日記を配布して読ませる。 2. 何が原因で2人は喧嘩になったか考えさせる。 3. もう一人の日記を読んで課題を捉える。 4. 何が問題だったのか考え、自分の考えを短冊用紙に書く。 この時点でのタブレットの「心の帯グラフ」に表現する。 5. 友達と対話する。 「心の帯グラフ」に表現された相手の考えを確認してから対話するように助言する 6. 全体で交流する。 7. 言動の背景にある気持ちを考える。 8. 寛容について話し合う。 再度「心の帯グラフ」に表現することで、自己の変容を認識できるようにす 	

る。
9. 今後の自分の言動を考える。

(コラボノートを) 使用してよかった点を教えてください。

- 問題となる2人の言動について全員の認識を可視化できた。
- 自己の考えをタブレットに表現することを通して、互いの考えを共有・比較することができた。
- 「寛容」の心について理解を深めることができた。

第5学年 道徳科学習指導案

指導者 窪田 啓伸

<主張点>

- 他者との対話である「友達対話」や、自分との対話である「自分対話」を通して、他者理解や価値理解を深めていけるような学習過程を創造する。
- タブレットの持つ「可視性」、「共有性」、「可変性」といったよさを生かし、友達と交流しながら自分の考えを深めていけるような学習を組織する。

1. 日時 平成30年12月6日(木) 第6校時
2. 主題名 「相手の立場に立って考えてみよう」(単時間主題構想)
3. 資料名 『すれちがい』(文部科学省「わたしたちの道徳」)
4. 主題について

(1) 主題をこう考える

今回取り扱う価値内容は「相互理解・寛容」【2・(4)】である。前学習指導要領においては、「寛容」として小学校では高学年にのみ位置づけられていた。それが新学習指導要領では、「いじめ問題」への社会的関心の高まりを背景に「道徳」が教科化されたこととともない新たに「相互理解」の内容が加わり小学校中学年から中学校まで継続的に指導されることとなった。新学習指導要領における「相互理解・寛容」に関する内容は、以下の通りである。

小学校3, 4年生	「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること」
小学校5, 6年生	「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」
中学校	「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心を持って謙虚に学び、自らを高めていくこと」

さて、日本における「寛容」は西洋におけるそれとは異なる。西洋における「寛容」は宗教的な意味(カトリックとプロテスタント)を帯び、「寛容する(赦す)もの」と「寛容される(赦される)もの」という“主従関係”が存在する。一方、日本における「寛容」は「寛大で、よく人を許し受け入れること。咎めだてしないこと」や「異端的な少数意見発表の自由を認め、そうした意見の人を差別待遇しないこと」(広辞苑)といった意味合いで捉えられており、対等な人間関係の中で互いを尊重する精神と言える。伝統的に「恥の文化」「間柄の文化」「相互協調的自己観」といった風土が醸成されている日本では、「寛容」の精神は、他者や集団社会とのかかわりの中でよりよく生きていこうとする人間の生き方と言える。

この「寛容」について新学習指導要領解説編では、「広がりや深まりのある人間関係を築くために必要な、謙虚な心と広い心をもった児童を育てようとする内容項目である」とされている。そしてキーワードとして、「謙虚な心」「寛容な心」や、5, 6年では「立場を尊重する」といったことが挙げられており、これらについては以下のように捉えている。

- ・ 謙虚な心：自分自身が成長途上にあり、至らなさも持っていることなどを踏まえ、相手から学ぼうとする姿勢。素直に相手の意見を受け入れる心。
- ・ 広い心：謙虚さと寛容さが一体となった時に生まれる心。常に相手から学ぶ姿勢をもち、自分と異なる意見や立場を受け止めることや、自分も同じような立場になることがあるかもしれないとの考えから、相手の過ちを許す心情や態度。
- ・ 立場を尊重：相手の立場に立って物事を考えることに価値があり、それを大切にしていこうとする気持ち。

このように、人と人との触媒としての「寛容」の精神には、自己と他者の差異を差異として認めつつ、どう折り合いをつけていくか、それによって自分がどう変わり新しい考え(価値観)が生まれるかということが問われている。これは、自分を大切に、相手の立場に立って考える人間尊重の精神であり、人間の行動の指針となるものである。5年生も残すところ3カ月余りとなり最高学年を目前にした子供たちに、学校風土づくりの担い手として是非この「寛容」の精神を学ばせたいと考え本主題を設定した。

(2) 児童の実態

一般的に、子供たちの仲間関係の発達には、外面的な同一行動による一体感が重視される「ギャング・グループ」、互いの類似性を言葉で確かめ合うなど内面的な類似性の確認が重視される「チャム・グループ」、内面・外面ともに異質性を認め自立した人間として尊重し合う「ピア・グループ」へと変化するとされている。中でも、小学校高学年から中学校にかけての時期は「ギャング・グループ」から「チャム・グループ」への移行期とされ、同質性を求める傾向があるため排他性の強い集団をつくる傾向がある。そのため、自分とは価値観や考え方の異なる他者を受け入れ難く、何らかの原因で衝突が生じた場合などには互いにその原因を相手に求め、関係は平行線をたどることも多い。

5年生になって8カ月、本学級の児童にも様々な場面で高学年としての自覚が感じられるようになってきた。例えば10月に実施された校外学習では、6年生が不在のなか、「たてわり班グループ」のリーダーとして下級生の面倒をみたり、グループが安全に楽しく活動できるよう全体に配慮したりする姿が随所に見られた。このような姿を見ると、何らかの責任を任されたり頼られたりしたような時や、自分よりも下の学年の子供たちに接する際には、自らの立場を自覚し、寛容に振る舞うことができている。

一方で思い入れが強い事柄や譲れない場面では“自分”が優先し、寛容な態度をとれないことも少なからずある。取り分け「遊び」では、しばしばそのような場面に出合う。例えばドッジボールをしている際、ある子供が「今のは（ボールを持って）ラインを出た」と主張する。それに対して、言われた子供は「出ていない」と返す。双方譲らず口論となり、自己の主張を繰り返すばかりで一向に収拾がつかない。いつしか、双方に同調する者が現れ益々高揚する。これは、「自己中心性」が残る低・中学年ではよく見られる光景であるが、高学年であっても、前述のようにルールや勝敗を巡っての「譲れない」場面では見られることも少なくない。

また、「約束」を巡ってのけんかも多い。交わっていた約束を、どちらかが“反故”にしたことから生じる場合が多い。そこで本主題を構想するに当たって、「寛容」に関する子供たちの認識の実態を捉えるために、この「約束」を素材にアンケートを実施した。結果は、以下の通りである。（児童数8名）

質問1 あなたは、約束を破られてけんかになったことがありますか？

あ る (3名) な い (5名)

質問2 「ある」と答えた人に聞きます。それは、どんな出来事でしたか？

- ・外遊びの時 ・大事な約束を破られた ・忘れた
- ・自分が先に約束をしていたのに、後から約束をした他の人と遊んだ

質問3 あなたが約束を破って、けんかになったことはありますか？

あ る (1名) な い (6名) 忘れた (1名)

質問4 「ある」と答えた人に聞きます。それは、どんな出来事でしたか？

- ・5時までに帰らずに親に叱られた

質問5 A君はB君と放課後に遊ぶ約束をしていました。ところが、約束の時間になってもB君は来ませんでした。あなたがA君ならば、どう思いますか？そして、その後はどうしますか？

- ・何も思わない。何で来なかったかを聞く。
- ・許さない
- ・その日は家に戻って直ぐには怒らずに、学校やラインで聞く。
- ・明日、事情を聞こうと思う。そして（実際に）聞く。
- ・あきらめる。B君に来なかった理由を聞く。
- ・どうしたのかなあ。と思う。それで、学校に行ってから「どうしたの？」と聞く。
- ・家の事情とかで来なかったのか。「他の人と先に約束していたならしょうがないな」と思う。普通に家に帰る。そして、学校に行ったときに事情を聞かせてもらう。
- ・「ひどい」と思う。そしてB君の家に行って、「どうして来なかったん？」と聞く。

質問6 「広い心」とは、どんな心だと思いますか？

- ・やさしい心（ママ） ・譲ってくれた時 ・ボールなどを片付ける
- ・ゴミ拾いなど、自然を大切にする活動に参加する ・やさしい心
- ・友達が泣いたり、けがをしていたり、傷ついている時に助ける人
- ・ちょっとしたことで怒らない
- ・東京ドームに坂本選手がボールを投げ入れ、それを獲ろうとしてぶつかっても怒らない
- ・あたたかい心 ・ゴミを拾っている人 ・ボランティア ・気遣いのできる心
- ・困っている人を助けられる ・例えば、落ちていた物を拾う

結果から、約束を「破った、破られた」経験のある児童の割合は多いとは言えない。子供たちに問うと、「忘れた」と答える者が多かった。一見、子供たちの関係性に問題が無いように思われるが、別の見方をすれば、約束の遵守に対する意識の低さの現れと捉えることもできる。固定的な人間関係の中で、学校、家庭を問わず日常的に学年の枠を越えて活動する機会が多い本校では、子供同士の関係が濃密で“家族的”なよさがある一方で、固定的な人間関係や他者に対する先入観、自他の区別がつきにくいといった負の側面もある。そのような中、「約束」に対しても認識の“緩み”が出ていると考えられる。また、僅か（2名）ではあるが、約束を「破った」と答えた者よりも、「破られた」と答えた者の方が多い。「破った」ことが意識化されるためには、「破られた」相手への想像力が求められるためであろう。日常の様子と合わせて考えると、その点でいくらか自己中心性が残っていると考えるかもしれない。

さらに具体的に、「約束を破られた」立場を想定した質問（質問5）では、「許さない」と答えた者が1名いるものの、他の子供たちは「何も思わない」「あきらめる」「どうしたのかと思う」などの回答が多く、その後の行動についても「どうして来なかったのかを聞く」など、概ね「寛容」な目線での回答であった。このことも外見上は問題が無いように思えるが、前述したような学校生活での争いにおける子供たちの態度と合わせて考えると、“約束破棄”に対する意識の低さと捉えることもできる。

このように、「何となく頭では理解しているが深く考えたことがない」「自分の思いを優先し実際の行動に結び付きにくい」など子供たちの現状と踏まえた時、「謙虚」な心や相手の「立場を尊重する」心について学ぶことは、今後の子供たちのより良い人間関係の形成にとって重要であると考えられる。

(3) 主題の展開

何らかの争いが生じた場合、双方の言い分にズレが生じることが少なくない。それは、互いの言動に対する認識の違いに原因がある。一方がそれ程重視していなかったことが、もう一方からすれば大きな出来事であるような場合である。背景には、出来事を無意識のうちに自分中心に捉えようとする傾向性や相手への想像力の欠如がある。

このような実態を踏まえて授業の導入では、8名のうち半分の4名ずつ、えり子とよし子異なる2人の日記を読む場を設定する。そして、「何が問題だったのか」を問い掛け、けんかの原因と思われることについて発表させる。どちらの日記を読んだ子供からも双方の言動に対して問題だと感じるところがあるだろうが、その中で、例えば電話をする場面を巡って次のようなズレが顕わになると予想される。よし子の日記を読んだ子供は、実際はえり子が分かれてから直ぐに電話をしたということが分かっておらず、「えり子が直ぐに電話をしなかったのが悪い」ということを問題として指摘するだろう。それに対してえり子の日記を読んだ子供からは、「電話はしたけれど通じなかつただけ」などの反論が出るだろう。このような話合いを通して、どちらの日記を読んだ子供にも「もっと相手の事情をよく知る必要がある」という意識が生まれ、「本当は、何が問題だったのだろう。出来事の事実を知りたい」という課題意識を喚起するとともに、人間はとかく自己中心的に出来事を解釈する傾向があることにも気づくことができるようにしたい。

もう一人の日記を読ませた後、予めタブレットの『コラボノート』に取り入れた時系列に沿った2人の行動の表を基に事実関係を確認し、改めて「何が問題だったのか」を問う。そして、2人の言動を総合的に判断し、どちらに方により問題があるかをタブレットの『心の帯グラフ』に表現する。これは、この時点での価値内容に対する認識の自己評価の場であるとともに、タブレットの“可変性”というよさを生かし、終末での認識の変容を捉えられるようにすることも意図している。さらに、タブレットの“共有性”を生かし、全員のグラフを電子黒板に映し出す。

その後、子供たちは2人の言動の問題点を、「短冊カード」（えり子－赤、よし子－青）に表現する。そして、その短冊カードを使って友達とダイアログ（対話）学習を展開する。その際、電子黒板にある対話の相手の『心の帯グラフ』を踏まえた上で行うよう助言する。ところで「ダイアログ」は「ディベート」とは異なる。ディベートは、話合いを通して自分が変われば“負け”であり、自己の考えの良さを主張することが目的である。一方「ダイアログ」は、相手の話を聞くことで自分の考えを今一度省みたり、自分の考えが変化したりするところに意義がある。子供たちの話合いは、往々にして自己を考えの正当性を主張するディベート的な様相を帯びてきがちであるが、ここではまず相手の考えに傾聴することに重点を置き、必ず何らかの反応（意見や疑問）を返すよう助言したい。

1対1による対話の後、全体交流の場を設ける。その際、ダイアログ学習を経た後の自己の考えを『コラボノート』のカードに表現する。それを、時系列の表の該当する言動のところに貼らせた上で交流する。この時点では、子供たちの多くは問題の所在を2人の「言動」（＝見える部分）に求めると思

われる。そこで一步踏み込んで、問題と思われる言動の背景にある「心」に着目させたい。例えば、えり子に関しては「電話がつながらないまま、お遣いを頼まれた時のえり子は、一体どんな気持ちだっただろう？」などの問いを投げ掛けるのである。このような全体交流を通して、「寛容」における重要な視点である「相手の立場に立って考える」経験をさせたい。

その後、「寛容」の価値内容に迫る。「2人が互いにどのような気持ちを持っていれば喧嘩にならなかったのだろうか？」などと問い掛け、「相手の気持ちに思いを巡らせて聞き合う」「自分にも同じようなことがあるのでは？」など自分と相手を重ねて考えることにより、「相手の気持ちを想像し、もし腹が立つようなことがあっても、『自分も同じようなことがあるかもしれない』と考え、自分の気持ちを伝えるとともに、相手の思いをよく聞いた上で“許す”ことが大切である」ということに気づかせたい。

そして最後には、以後の自己の在り方について考える場も設定したい。

5、本時の学習指導

(1) 目標

- ・「謙虚な心で相手の立場を尊重して考える」という「寛容」の心について理解を深めることができる。
- ・自己の考えをタブレットに表現することを通して、互いの考えを共有・比較することができる。

(2) 学習指導過程

学習活動	教師の支援と評価
<p>1、教材文を読んで課題を捉える。</p> <p>(1) えり子とよし子の日記のうち一方を読む。</p> <p>(2) もう一人の日記を読んで課題を捉える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・問題状況への関心を高め学習への見通しを持てるよう、アンケート結果の一部を提示しながら日常の経験を想起させるとともに、以下のような投げ掛けをする。 ある日、えり子とよし子という仲良しの2人がけんかをしました。理由は、2人で交わした約束がちよっとしたすれ違いで守られなかったからです。今から、その日の女の子の日記を配ります。けんかの原因だと思われるところに線を引きながら3回読んでください。そして、何が原因でけんかになったかについて考えてみましょう。 ・8名のうち、4名ずつ異なる人物の日記を配布し読ませることで、後の学習で2人の認識の違いが顕在化するよう仕組む。 <p>☉ 何が原因で2人はけんかになったと思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの発言から、けんかの原因にズレが生じている場面を取り上げ、一方の立場のみでは事実の把握が困難であることと同時に、背景に「自分中心に考えがちである」という傾向性があることに気づけるようにする。 ・特別支援学級の児童の実態を踏まえ、1回の範読の後2回読ませる。出来事を時系列に整理した表を基に2人の言動について確認する場を設ける。【2人の行動】 <p>何が問題だったかを探り、けんかにならないために大切なことを考えよう。</p>
<p>2、何が問題だったのか考える。</p> <p>(1) 自分の考えを短冊用紙に書く。</p> <p>(2) 友達と対話する。</p> <p>(3) 全体で交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どちらの言動により問題があったのか、この時点での考えをタブレットの『心の帯グラフ』に表現し、電子黒板を使って全員の反応を共有できるようにする。 ・2人の問題点を短冊カードに書くことにより、自己の考えの明確化を図る。 <p>(評①) けんかの原因となる問題点を考え、短冊カードに書くことができたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隣の友達と「対話」の場を設定する。その際、予め【心の帯グラフ】に表現された相手の考えを確認してから対話するよう助言する。 ・対話として、それぞれの考えに傾聴すること、疑問を投げ掛けたり、問い返しをしたりすること、一人の考えに対して一定の時間をかけて話し合うことなどについて助言する。 ・対話を通して自分が考える両者の問題点を1点ずつコラボノートのカードに記述し表の中に位置づけることにより、問題となる2人の言動について全員の認識を可視化できるようにする。その際、ローマ字打ちが困難な児童には「手書き入力」が可能なようにしておく。【2人の行動】
<p>3、言動の背景にある気持ちを想像し「寛容」についての考えを深める。</p> <p>(1) 言動の背景にある気持ちを考える。</p> <p>(2) 寛容について話し合う。</p>	<p>☉ ここにカードが多く集まっていますね。この時、2人はどのような気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題と思われる場面（例えば「電話」や「謝る」場面）にはカードが集まると思われる。それらの場面を取り上げて気持ちを想像することで、「言動の背景にある気持ち考える」という新たな視点を投入する。 <p>【例】電話が繋がらないままお遣いを頼まれた時、えり子はどんな気持ちだったでしょう？⇒電話が繋がらない。どうしよう。(不安)</p> <p>☉ 2人にどんな気持ちがあれば、けんかにならなかったのでしょうか。</p> <p>相手の気持ちを考え、もし腹立つことがあっても「自分も、相手と同じようなことするかもしれない」と考え、自分の気持ちを伝えるとともに、相手の思いをよく聞いて許す方がよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えた気持ちは「寛容」という言葉で表現できることを知らせる。 <p>(評②) 2人の気持ちを想像し、寛容の大切さに気づき、自分なりの解釈をノートに記述することができたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・再度【心の帯グラフ】に表現することで、自己の変容を認識できるようにする。 ・これまでの生活を振り返り、これからの生活で心掛けたいことについて考えノートに記述する活動を設定することで自分との関りで捉えられるようにする。 <p>(評③) これから心掛けることについて具体的にノートに書けたか。</p>
<p>4、今後の自分の言動を考える。</p>	

